

主との交わりのすばらしさ

2015年1月14日、春日部家庭集会
ゴットホルド・ベック

1ヨハネ

1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのこばについて、

1:2 ——このいのちが現われ、私たちはそれを見たので、そのあかしをし、あなたがたにこの永遠のいのちを伝えます。すなわち、御父とともにあって、私たちに現わされた永遠のいのちです。——

1:3 私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。

1:4 私たちがこれらのことを書き送るのは、私たちの喜びが全きものとなるためです。

1:7 しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

現在一番はやっている悩みの種、一番はやっている病気は、癌じゃない。孤独病。癌になっても別に。風邪か癌か関係ない。けれども、孤独病になると大変です。したがって、孤独になった人々にとって、どうしても必要なのは「交わり」を持つことです。

今読んでもらいました箇所の中で、「私たちと交わりを持つようになるため」という言葉が出ています。また「私たちの喜びが全きものとなるためです」と。悩んでいる人々をどういふふうに励ましたら、どうしましょうか。私はよく、「もうちょっと」と言います。聖書はよく「もうちょっと」と言わないけれど、同じ言葉を明らかにするために「もうしばらくすると」とあります。ヘブル書の著者は当時のいろいろなことで悩んでいた兄弟姉妹を励ますために書いたのです。

ヘブル

9:28 キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身をささげられましたが、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。

10:37 もうしばらくすれば、来るべき方が来られる。おそくなることはない。

結局、「もうちょっと」ということです。イエス様を知るようになった人々は、輝く素晴らしい将来を持つ者です。イエス様は彼らにとって道であり、真理であり、またいのちそのものです。イエス様なしの将来は確かに真っ暗闇です。

けれども、イエス様を知るようになった者は安心して前向きに生活することができ、喜ぶことができます。なぜなら、彼らははっきりとした確信を持っているからです。すなわち、「もうちょっと」イエス様はお出でになります。そして今日かも知れないと考えると、嬉しくなります。どういう状況に置かれても、どういう問題があっても、われわれは希望を持って将来に向かうことができます。ですから、「もうしばらくすると、主は来られる」と絶えず覚えるべきなのではないでしょうか。確かに、まだ天国じゃない、だから人間はみな悩みます。重荷を負っている者です。けれども、今話したように孤独からの解放するために「交わり」をもつことこそが大切です。

初代教会とはどういう教会であったかと言いますと、交わっていた教会でした。ひとつになった教会でした。ちょっと見てみましょうか。初代教会の様子について、使徒行伝の2章になります。使徒行伝に出て来る、主の恵みによって救われた人々の交わりのような、まことの交わりとはいったいどういう交わりだったのでしょうか。

使徒行伝

2:42 そして、彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていました。

2:43 そして、一同の心に恐れが生じ、使徒たちによって、多くの不思議なわざとあかしの奇蹟が行なわれた。

2:44 信者となった者たちはみないっしょにいて、いっさいの物を共有にしていた。

2:45 そして、資産や持ち物を売っては、それぞれの必要に応じて、みなに分配していた。

2:46 そして毎日、心をつ一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、

2:47 神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。

ここに出て来る信徒たちは、あの五旬節の時、救われた人々ですけれど、ここで彼らは使徒たちの教えを守った、と書かれています。この「使徒の教え」とはいったい何でしょうか。使徒が伝えたのはもちろんイエス様の教えでした。イエス様の教えよりも、イエス様ご自身でした。われわれは一つの教えを宣べ伝えるべきじゃなくて、イエス様だけを紹介しなければなりません。

終わりの時代に生きているわれわれにどうしても必要なのは、この「使徒の教え」とどまることです。けれども、私たちはそれとともに、信徒の交わりとはいかなるものであるかを知るべきではないでしょうか。「使徒の教え」がイエス様ご自身であるなら、信徒の交わりもイエス様との交わりを意味しているのです。聖書を見ると、聖書はただ一つの交わりが書かれています。それは父、ならびに、御子主イエス様との交わりであります。

コリント第一の手紙

1:9 神は真実であり、その方のお召しによって、あな

たがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。

この御子、主イエス様との交わりこそ、信徒の交わりの源です。私たちはほんとうに父、ならびに、御子イエス様との交わりを知っているのでしょうか。言うまでもなく、この交わりとは議論によって生まれるものではない。教理を同じくするという理由で生まれたり、また、会議を通して決議された結果を通して生まれるというものではありません。この交わりは、いのちと霊の交わりです。この交わりの中には、少しの暗いところも、陰もあってはなりません。

父、ならびに、御子イエス様との交わりには、確かに完全な信頼がなければなりません。もちろんそうだったのです。父は主イエス様を心から信頼され、ご自分の思っていること、考えていること、自分のご計画を全部イエス様に教えて下さり、またすべてをイエス様にゆだねられたのです。全部の計画を、少しの不安もなくゆだねることができたのです。

反対にイエス様の父に対する態度も全く同じでした。イエス様は父なる神に完全に依り頼み、少しも疑わず父の御心をうかがわれました。あのように驚くべき深い悩みの中にある時も、十字架に向かって歩まれた時も、イエス様は少しも疑いませんでした。全き信頼を父に置いておられたのです。自分の思いではなく、御心だけがなるように、これこそがイエス様の変わらない態度でした。イエス様と父なる神はお互にそんなに信頼し合っておられたので、その間にはいつも絶えざる平安と静けさがあったのです。そのお互いの信頼が聖書は交わりであると言っています。

この父と御子主イエス様のすばらしい交わりに、人、人間も加わることができるとは驚くべきことではないでしょうか。主は、何ゆえにわれわれをもこの交わりに召してくださいましたか。ただひとつわかることは、量り知れない主のご愛のゆえであるということです。イエス様は、この交わりに人間ひとりひとりを招いてくださるために、この世に来てくださいました。イエス様が、地上におられた時に願っておられたことは、第一に、弟子たちがこの交わりに入ることができるようになることだったのです。

われわれも、救われるために救われたのではなく、このすばらしい交わりにあずかるために、救われました。私たちは良心のとがめが消され、救いの確信を得るために召されただけでなく、この交わりに入るために、この交わりにあずかるために召されたのです。もし人が、父、ならびに、主イエス様との交わりに入りますと、使徒行伝にある、信徒の交わりに入ったことになるのです。

使徒行伝に出て来る信者たちは格別に特別な信者の人々ではなかったのです。使徒たちも同じく特別な人々ではありませんでした。しかし使徒はいかに造られたのでしょうか。使徒はイエス様に選ばれ、特に召された人々で

した。マルコ伝の3章を見ると次のように書かれています。

マルコ

3:13 さて、イエスは山に登り、ご自身のお望みになる者たちを呼び寄せられたので、彼らはみもとに来了。
3:14 そこでイエスは十二弟子を任命された。それは、彼らを身近に置き、また彼らを遣わして福音を宣べさせ(るためであった)

イエス様は、これを見るとわかりますように、使徒たちをまず第一にご自分の身許に置くために、それからあとで次に遣わすために召されたのです。

スイスの大きな神学校があって、玄関に入ると目の前に世界地図があるんです。左側に「お出で！」と書いています、もちろんドイツ語ですけれど。そして右側に「出て行け！」と書いてあります。「お出で、お出で、出て行け」。イエス様はそういうお方です。イエス様の身許に行った人はもう黙ることが出来ない、イエス様を紹介せざるを得なくなる。救われていない人々に対する祈りがなければ、その人の信仰は、非常に疑わしいのではないのではないのでしょうか。救われるために救われたのじゃない。まだ救われていない人々もイエス様を知ってもらいたい。

イエス様はまず第一にご自分の身許に置くために弟子たちを召された。そしてそのあとで、第二に遣わすために召されたのです。イエス様はご自分が永遠の昔から持つておられた父との交わりに、弟子たちを、信徒たちも入ることが願われました。そして、イエス様は今日も、全く当時と同じように、この交わりにわれわれがあずかることを、願っておられます。父、ならびに、御子イエス様との交わりにあずかることができるとは、何という特権でありましょう。この交わりを喜ばずして、ほかのもので満足することがあっては残念です。

私たちは、イエス様に仕えることが、一番大切であると考えますと、もちろん主のお考えはちがいます。イエス様にとっては、まずご自分との交わりを持つようにわれわれに求めておられます。人々は熱心な働き人ならば良い働き人だと考えます。主の思っているのは全く違う。主のために熱心にご奉仕をしますが、主との親しい交わりを持っていない人々が、残念ですけど、たくさんいる。これはあわれなことなのではないでしょうか。

われわれは、弟子たちと同じように、この世と罪から逃れるために選出されましたが、そればかりではない。父、ならびに、御子イエス様との交わりにあずかるべく召された者です。信徒の交わりは、父、ならびに、御子、主イエス様との交わりであり、今、話したようにいのちの交わりです。イエス様のからだなる交わり、すなわち、信徒の交わりは、いのちの交わりですから、そこには制限がなく、不安がなく、疑いがなく、全き信頼がなければならぬはずで、この交わりに、私たち一人一人も召されているのです。けれども、問題はしたらこの交わりに、全き

信頼に、入ることができるかということです。

弟子たちは、最初は、イエス様と親しい交わりを持っていなかったんです。確かに三年半、一緒に生活しました。けれども本当の意味での交わりはなかったのです。最初はただ、イエス様と関わり合いがある、と言った程度でした。イエス様は弟子たちを召し、彼らは三年半の間、イエス様と一緒に生活しました。この間、イエス様はご自分のご目的を弟子たちに明らかにするために、何とかして弟子たちと親しい交わりに入ろうとなさいました。イエス様は、彼らを父、ならびに、神との交わりに導こうとなさいましたが、彼らは駄目でした。全然、理解できなかったのです。イエス様は、弟子たちと、少しの疑いもない全き信頼を置く交わりに入りたかったのですが、いざ、イエス様が御心を示そうとなされた時、弟子たちは全然、駄目でした。イエス様のことを誤解してしまったのです。弟子たちはそれだけでなく、お互いの間にも、深い交わりを持ってなかったのです。ただ、関わり合いがあると程度に過ぎなかったのです。弟子たちの間には交わりがなかったばかりでなく、時々、喧嘩しなければならないといった有様でした。

12人の弟子は、ユダを除いて、心からイエス様を愛していたのです。そのために、喜んで、自発的にすべてを捨てて、イエス様に従うようになりました。それにもかかわらず、彼らの間には本当の交わりがなかったのです。お互いに妬み、誤解し、争いました。二人の弟子、兄弟だったんですが、ヤコブとヨハネが、自分が一番偉くなりたいた願ったのです。他の人々を除け者にして相談しました。ちょっと一カ所見てみましょうか。

マルコ

10:35 さて、ゼベダイのふたりの子、ヤコブとヨハネが、イエスのところに来て言った。「先生。私たちの頼み事をかなえていただきたいと思えます。」

10:36 イエスは彼らに言われた。「何をしてほしいのですか。」

10:37 彼らは言った。「あなたの栄光の座で、ひとり先生を右に、ひとりを左にすわらせてください。」

10:38 しかし、イエスは彼らに言われた。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。あなたがたは、わたしの飲もうとする杯を飲み、わたしの受けようとするバプテスマを受けることができますか。」

10:39 彼らは「できます。」と言った。イエスは言われた。「なるほどあなたがたは、わたしの飲む杯を飲み、わたしの受けるべきバプテスマを受けはします。」

10:40 しかし、わたしの右と左にすわることは、わたしが許すことではありません。それに備えられた人々があるのです。」

10:41 十人の者がこのことを聞くと、ヤコブとヨハネのことで腹を立てた。

怒っちゃったね。このように弟子たちの間には本当の意

味での交わりがありませんでした。しかし五旬節が来た時、弟子たちは完全に変わりました。

五旬節の時から彼らは本当の交わりを持つようになりました。ペテロが立ち上がった時、みんなも、他の11人もともに立ち上がったと聖書は言っています。ペテロが立った時、他の者も一緒に立ったのですけれど、これは前もってそのように相談していたわけではありません。自発的に、自然に、そうなったのです。12人の人はもはや12人のひとりびとりではなく、12人がひとつのからだをなしたのです。

五旬節の日の立役者は確かにペテロでした。しかし、聖書を見ると、ペテロだけが目立ったわけではなかったのです。人々はみなを見て驚いた、と書いてあります。ペテロだけじゃない。五旬節はいわゆるイエス様のからだなる教会の誕生日でした。このまことの教会とはもちろん一つの宗教団体でもないし、一つの組織でもありません。有機体です。この時から信者はもはやひとりびとりバラバラでなく、イエス様を頭とする肢体に結び合わされたのです。ペテロと他の弟子たちは、本当にもう一つでした。霊の交わりを持っていました。使徒たちはお互いに全く信頼し、そこには他の人たちと互に喧嘩し、お互いに恐れるといったことは見受けられませんでした。彼らは本当の意味でひとつでした。

五旬節の前までは、このような交わりは、天の父なる神と主イエスとの間にしかなかったんですけれど、この日から、五旬節から、多くの人々もこの交わりに入ることになりました。3000人の人々がこの交わりにあずかったと記されています。これらの人々は「使徒の教え」を守り、「信徒の交わり」をなしたと聖書は言っています。彼らはイエス様のみこころを自分の生活の基準として受け入れ、自分たちはすでに「信徒の交わり」にあずかっているという確信を持っていました。この交わりは外から来るのではなく、内に住んでおられる御霊のゆえに生まれたのです。ちょっと一カ所見てみましょうか。

エペソ

4:4 からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。

4:5 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。

4:6 すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。

これらは、彼らの一つになった親しい交わりの源でした。交わりとはすべてのものを共有にすると言うことです。初代教会の兄弟姉妹はそうしていました。前に読みました、使徒行伝の2章44節、

使徒行伝

2:44 信者となった者たちはみないっしょにいて、いっ

さいの物を共有にしていた。

大部分じゃない、みな。

誰も自分の持ち物を主張する者もなく、日々心一つにしていた、と聖書は言っています。彼らは霊において一つであったばかりでなく、考えも、願いも、心も、一つでした。これこそ信徒の交わりであり、イエス様のからだとしてあるべき姿です。私たちの一人一人も、「使徒たちの教え」を守り、「信徒の交わり」をなしたと言える状態になったら本当に幸いと思います。

使徒たちは、イエス様とともに過ごした三年半の間、このまことの交わりを知らなかったのです。これは、交わりに入る準備の三年半だったでしょう。この三年半の間、実りのない時のように見えますけれど、この三年半の年月の間、彼らの古い性質は少しずつ出てきました。また取り除かれたのです。もし弟子たちがイエス様に従わず、自分の職を持っていたなら、彼らは信心深い人として、みんなから尊敬された人々だったでしょう。けれども、イエス様とともに歩んでいた彼らは、自らの姿を教えられ、イエス様の身許で、本質的に造り変えられていきました。主の光に照らされ、彼らの心の暗いところは、だんだん取り扱われ、明るみに出されてきました。彼らの心に隠された思いがあらわれたのです。もちろん弟子たちは他の人々より、悪い人々ではなかったけれども、イエス様の光に照らされた時、絶望的な、自らの真相を教えられました。イエス様が十字架におかかりになった時、彼らは全くもう絶望してしまったのです。その時彼らはバラバラになって、みな逃げてしまったのです。

聖書を通して提供されている交わりの秘密とは何でしょうか。

1ヨハネ

1:7 もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

けれども、私たちが今持っている悩みは、光のうちを歩むどころか、光の中に立つことすらできないのではないのでしょうか。イエス様の光に照らされますと、われわれの生まれながらのものは、徹底的に駄目である、全く役に立たないもの、汚れたものであることがわかります。

もし、イエス様との交わりを正しくすると、お互いの横の交わりは正しくなります。御霊はわれわれの上に注がれ、私たちは一つのからだとなるように。これこそ主の導きの目的です。この交わりとは、どういう交わりでしょう。光の交わりです。いのちの交わりです。愛の交わりです。

もし、この交わりがわれわれの中に起きると、主ご自身が、そこにおられると呼ばれるほど、主の御栄えをあらわす、われわれとなることができます。

神の家とは、生ける神の教会のことであって、それは真理の柱、真理の基礎です。私たちも、このような教会になりたいものなのではないでしょうか。われわれを召し、父、ならびに、御子イエス様との交わりに入れて下さった、イエス様に心からなる感謝をささげましょう。

おわり